『立正学生談話資料』作成マニュアル

白岩広行（shiraiwa@ris.ac.jp）

■3年生期末レポート

　友人や家族との日常会話を録音し、そのうち5～10分の内容を文字化して提出すること。録音と文字化の方法については別途レクチャーをおこなう。完成した談話資料は、研究成果としてアピールし、他大学の研究者や学生も活用できるよう、本人の同意があれば、匿名のうえで白岩の個人サイトで公開する。

　参考：立正学生談話資料<https://h-shiraiwa.sakura.ne.jp/kenkyu/risdan.html>

【目的】

（1）談話資料として、白岩ゼミの各学生の卒論執筆に役立てる。

（2）学外にも公開することで、日本語研究に広く役立てる。

【方法】

（1）2人の友人どうしの日常会話を10～15分ほど録音する。3人以上の会話は文字化が面倒なので、必ず2人どうしで話すこと。白岩ゼミのゼミ生どうしだとスムーズに録音できると思うが、調査の主旨を理解し、別紙の同意書にサインできる18歳以上の相手なら、ゼミ外の学生や家族などでもよい。録音機器は白岩から貸し出すことができる。各自のスマホの録音機能を使ってもよい。

（2）別紙の同意書（「約束します」の紙）、フェイスシート（「あなたのことについて教えてください」の紙）に必要事項を記入する。

（3）各自が、録音した会話のうち5分程度をテキストファイルとして文字化する。ゼミ生どうしで会話した場合、お互いの担当する文字化部分が重ならないようにすること。パソコンで文字化する場合、フリーの音声再生ソフト「おこしやす」を使うと便利である。

【提出】

（1）音声ファイルは提出する必要はない。

（2）同意書とフェイスシート（「約束します」と「あなたのことについて教えてください」の紙）は調査終了後、ゼミの時間に白岩に提出すること。夏休み明けでもよいが、無くさないよう早く提出したほうがよい。白岩がまとめて管理する。

（3）文字化資料は、テキストファイルかwordファイルとして、メール添付で白岩に提出すること。

【表記の規則】

1. 話者記号は「SH」（Shiraiwa Hiroyukiの場合）のように話者のイニシャルとする。レポート提出後に白岩が話者記号をつけなおす。

2. 「漢字かなまじり」で表記する。漢字・かな・記号は全角、英数字は半角とする。数字は原則として算用数字を使用するが、熟語など漢数字が自然な場合には漢数字を使用する。

　　例）2014年、3日、2人 ／ 二人三脚、一仕事

3. かなづかいは標準的な日本語の表記にしたがう。小さい「ぁぃぅぇぉゎ」は使用しない。

　　例）「あぁ、やべぇ」「ぐゎんばれ」とは書かず「あー、やべえ」「がんばれ」と書く。

4. 記号として「～」「！」「♪」は使用しない。長音符「ー」は使用する。長音を「ああ」のようにかなで表記するか、「あー」のように長音符で表記するかは、各自の判断による。

　　例）「あ～、やば！」「やった♪」とは書かず「あー、やば。」「やった。」と書く。

5. ふりがなは使用しない。難しい漢字は使わず、かなで表記する。漢字表記にするかかな表記にするかの判断は、各自の判断による。一般的な読みにならない漢字の使用は避ける。

　　例）「高え」「違え」とは書かず「たけえ」「ちげえ」と書く。

6. 話し相手のあいづちはカッコに入れ、その発話に埋め込む。

　　例）SH：昨日さー、（TI：うん。）久しぶりに渋谷に行ったんだ。

7. 補足のための記号はすべて全角とし、以下のように用いる。

。 文末には「。」をつける。ただし、文末と判断するための厳密な基準は設けない。

、 読みやすさを考慮して適宜「、」をつける。音の切れ目がなくても適宜つける。

？ 疑問文の文末には「？」をつける。疑問の助詞がない場合や文末が上昇調イントネーションでない場合も、文脈に応じて適宜つける。

… 文末が言いよどんでいる場合や、言いよどみから発話を始める場合には「…」をつける。

＊ 音声が聞き取り不能であった部分や意味が不明な部分は「＊」で示す。その際は、おおむねその部分の拍数に相当するだけの個数の「＊」を用いて表記する。

（ ）あいづちは、発話者の発話中に（　）でくくって入れる。上記の項目6参照。

「 」他の人の発話の引用など、視覚上、区別したほうがわかりやすいと思われるものは「　」でくくって示す。

【 】文脈を理解するうえで必要な補足情報がある場合には【　】でくくって示す。

｛ ｝笑いや咳など、非言語音は｛　｝でくくり、｛笑｝｛咳｝のように示す。

8. 人名や地名、勤め先など、個人が特定されうる固有名詞については「○○【友人の名前】」のように伏せ字にして【　】で補足情報を加える。

9. 以上の表記については、白岩が整備する段階で修正を加えることがある。